

「悲しみに立ちほだかる主」

ルカによる福音書 第7章 11節～17節

説教 鷹澤 匠 牧師（大和キリスト教会）

大和キリスト教会に来て約一年半が経とうとしています。最初に教会に対して抱き、今もなお抱き続けている印象。それは、とてもよく説教を聴く教会だ、ということです。皆様、説教を聴くことを心から楽しみにしておられます。

これは、大和キリスト教会だけの話ではないでしょう。皆様も今日ここに、御言葉を聴くために集まっている。何のために、そうしているのでしょうか。それは、御言葉を通し、イエス様との出会いを経験させていただくためです。

イエス様はこのとき、弟子たちや大勢の群衆と共にナインという町へ向かっておられました。町に入ろうとしたとき、町の門から葬儀の一行が出てきました。当時、誰かが亡くなると、遺体が腐らないうちに町の門から外に出て、町の外のお墓へと葬ることが習慣になっていました。

イエス様の一行が目にしたのは、夫を失った女性の一人息子の葬儀でした。亡くなった息子は青年の年頃だったと思われます。成長した彼の姿を見て、町の人たちは口にしていました。『女手一つで育てるのはどんなに苦労があったことか。でもあの子がこんなにたくましく育ててくれた。』彼自身も頼もしい言葉を口にしていました。『お母さん、今まで苦労かけたね。これからは僕がこの家を支えていくよ。お母さんに楽をさせてあげるからね。』

しかし、その彼の命が途絶え、あっと言う間に体が腐っていくのです。一刻も早く町の外へ運び出さなければいけません。母親は、もう少し一緒にいさせてほしいと泣いてお願いをしたかもしれませんが。町の人たちは胸がつぶれる思いで答えたことでしょう。『気持ちは痛いほど分かる。でも彼は死んだのだ。町の外へ運ばなければならない。これはもう、私たちがあらがうことができない宿命なのだ』。

葬列が町の門から出てきた時、群衆や弟子たちは道の脇に寄ったことでしょう。葬儀の列は、誰も止めることはできないし、止めてはいけないものだからです。しかし、イエス様は違ったのです。イエス様はお一人、葬列の前に立ちほだかり、言われました。「もう泣かなくともよい」(13節)。「若者よ、あなたに言う。起きなさい」(14節)そして、イエス様は若者を生き返らせ、母親のもとへお返しになりました。

この時、イエス様が母親に対して抱かれた「憐れに思い」(13節)は、元々は『内臓が動く、内

蔵が打ちふるえる、内臓が揺さぶられる』という意味の言葉です。体の内側から突き上がってくるような憐れみ。ギュッと内臓が掴まれるような痛みと悲しみを伴う憐れみ。内臓ごとグウッと母親の悲しみに寄り添い、その悲しみをまるごと自分の体の中に取り込んでしまうような憐れみ。また、「もう泣かなくともよい」(13節)も、元々は『泣くな!』という激しい言葉です。

この激しさが、この激しい憐れみが、葬儀の列を、『人間の宿命であった死』の歩みを止めた。誰も止めることができなかった「死」、全てにまさる力を持っていた「死」。その「死」は、イエス様の憐れみによって行く道をはばまれ、それ以上、先に進むことができなくなったのです。そしてこの出来事の先に、イエス様の十字架とおよみがえりの出来事があった。

人々は、口々に言いました。「大預言者が我々の間に現れた」(16節)「光あれ」と言われ、光がある。「泣くな」と言われ、その涙をぬぐう。「起きなさい」と言えば、死人が生き返る。死さえも打ち破る神様の言葉の力強さを、イエス様の中に見たからです。人々はまた、この出来事の中に神様の「心」(16節)をも見た。これほどまでに激しい、死に打ち勝つ憐れみの心を、神様が自分たちにかけてくださった!と。

町から外へ行こうとした葬儀の列と、町に入ろうとしていたイエス様たちの列は、ここで一つとなったことでしょう。一つとなって、神様をほめたたえながら、まるでお祭りのように、町の中へと入っていった。その真ん中にはイエス様がおられます。そして生き返った若者がいて、あの母親がいる。母親はまだ泣いています。しかし今度は、喜びの涙を流している。人々は、そのイエス様や母親たちを囲みながら、神様を賛美しながら、町の中へと入っていくのです。

この祝祭のパレードの中に、私たち自身の姿も見いだすことができます。私たちも、罪赦され、よみがえりの命が保証され、このパレードに連なっている。そう、このパレードは「教会」なのです。神様の言葉を聴いてイエス様と出会う、こんなに激しい憐れみを私たちに向けてくださるイエス様、十字架にまでかかってくさったイエス様、そのイエス様と出会い、喜び歌う群れ、私たち教会。教会は、復活の光の中で、神様をほめたたえる歌を歌いつつ、歩いていくのです。

(記 本庄侑子)